日だんごを買いに来る女性、きまってうすぐらくなりかけたころなので気味悪く思い、ある晩おやじさんは女のあとをつけて行くと、ちょうどシノが殺された附近まで来ると姿を見失ってしまった。しかしあきらめずに次の晩もその次の晩もあとをつけて行った。ある晩いつものようにあとをつけて行くと、いつか姿を見失ったが、どこからかかすかな赤子の泣き声が聞こえて来たのでおやじさんは驚いてとぶようにしてそこから少し離れた千光寺に至り住職にこれを告げた。住職とおやじさんは急いで引返し、泣き声をたよりにやぶの中をかきわけるように行くと、大きな墓石の下からだったので、やっと石をおしのけると生まれて間もない男の子が微笑していた。しかも赤ん坊のそばには、おやじさんが売っただんごが置かれてあった。つまり母の愛情が魂となって我が子を育てていたのだった。この赤ん坊は千光寺で引き取って育てた。

時に明応四年八月で後土御門天皇の時代で今を去る四百八十年前のことであった。千光寺は、小田氏が滅び佐竹領になったとき大曾根の現在地に移転したのだと言われている。拾われた赤ん坊は、生まれながら頭髪が白かったのでその名を頭白丸と称し、長じて千光寺の住職となり学徳一世に高い名僧となり、時人頭白上人といって上人の徳を慕った。そして上人は、母シノの冥福を弔って建立したのがこの大五輪塔というわけである。

さて、話は前に戻るが、上人の父盛行は妻が殺害されたと聞いて発心し佐源次と同じように六部となり諸国を巡回することとなった。そして佐源次、盛行の二人は行脚の末偶然にも筑波の大御堂観音で会うことができたのは皮肉な運命のめぐり合わせであった。会話中、両人の身の上話しのあげく遂に佐源次が盛行の妻をさしたということがわかり、佐源次は首をとってくれと頼んだが、以前は凶悪な山賊でも、今は六部の身の上、今更かたき打ちも無益とあって両人は互に義兄弟の約束を結んで共にシノの冥福を祈ったということである。

もとより信じられない物語りではあるが、現在立派に上人の名入りの五輪塔が残っていることは上人の亡き母への深い感謝の気持ちと偉大なる母の慈愛を物語る伝説としていつまでも残したいものである。

(2) 日枝神社　新治村沢辺にある。山王権現或は山王様の名で知られている。平安初期伝教大師（最澄）の高弟最仙上人が比叡山延暦寺を模して東城寺を開いたとき延暦寺における坂本山王（日吉神社）と同じ意味で東城寺に結びつけて坂本山王をこの地に勧請したもので神仏混淆（本地垂迹）のあらわれである。創建は平城天皇